

平成28年2月9日(火)

老球の細道210

読書のすすめ『龍馬がゆく』(司馬遼太郎著)

会津バスケットボール協会 室井 富仁

汗をかいた後のビール、読書の後のコーヒー、そして努力の後の勝利。これは、私の快感3原則。「生きていて良かったなあ!」と感じる至福のひとつときだった。最近、汗をかくより恥をかくことが多く酒量も減少。勝負する場もなく努力もありきたりである。

そんな刺激のない毎日の中で、もっぱら読書量は増え、コーヒーを飲む回数が増えている。コーヒーには砂糖を入れる。人間ドックでは内臓脂肪増加、甘い物を控えてという所見だが好きなものは断てない。砂糖の甘さより人間の甘さが脂肪に変化したのだと思う。

『月刊バスケットボール(2016年3月号)』に元金沢総合高校監督の名将・星澤純一先生の「自宅で一人でできる練習メニュー」という記事があった。その中に「新聞、本を読んで判断力を磨こう」が紹介されている。読書によって、凄い人のことを知り、「じゃあ、私も頑張ってみよう」とか、色々な事象を知ることによって、「自分はそのに対してどう思うか」「自分であればどんな対応をするか」などと考える癖がつく。それがコート内での判断力、ベンチワークでの決断力につながるという。私も同感である。

特に歴史物には人生の原理原則が網羅されている。下記はA高校時代に「高校生にすすめる一冊」という内容で「A高校図書館報」に掲載された私の愚文である。

【生きていくかぎり何かの中毒にかかっていないとつまらない。今まで色々な中毒に冒されながら生きてきた。活字中毒もその中の一つであり、日々の生活では大きなウエイトを占めている。最近加齢のせいか読みながら忘れてしまっていて、読後の感想が書けない。華麗に加齢しようと思っているが、認知症と加齢臭におびえながら今日もひたすら活字を追い続けている。追うごとに、本の中の人物、生き様、琴線に触れる言葉との出会いが果てしなく続く。そのような出会いが、今までのちっちゃな自分を破壊し、ワンランクレベルアップした「別人28号」へと変身させてくれる。

本のジャンルにこだわりはないが、特に歴史物が好きである。今回薦めるのも歴史小説『龍馬がゆく』。この小説は坂本龍馬の幕末時における生き様を描いたものであるが、随所にわが故郷会津藩の話が出てくるところにも興味もたれる。教員になりたての20代に読んだが、広い世界に眼を向け、自分の夢に向かって忠実に前進することを教えられた。

ご存じのように、坂本龍馬は当時の会津藩を敗北に導いた「薩長連合」(薩摩藩と長州藩の同盟)を企てた張本人である。当時の会津藩の人たちにとっては許せない人間だったろう(後に会津藩見廻り組の者に暗殺される)。この本の中で随所に出てくる龍馬の処世訓がある。「この世に生を受けたるは、事を成すことにあり」。この言葉を思い起こすたびに、防御の生き方から攻撃の生き方へギアチェンジされていく。

A高校の教育目標に社会のリーダーになりうる人材を育成することとある。色々な困難を克服し、他人のやっていないことを先がけてチャレンジするのがリーダーの真骨頂。坂本龍馬の生き様こそまさにその通り。リーダーを目指し世界的な視野で生きようとしている人、常識にとらわれず斬新な発想で物事に取り組むことを是とする人、そして毎日の生活に疲れ切ってガッツのなくなっている人には是非読んでもらいたい。

感動は読まなければ見つからない。燃えなければつかめない】